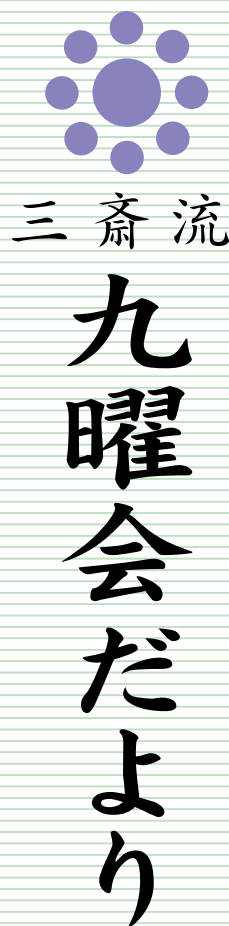




薄茶席(富士の間)

翠雨降りしきる道場に於いて 待望の新樹の茶会開催 明るい兆しの到来を願う



発行

三齋流九曜会

会長 小林 祥泰

事務局 出雲市今市町 53

コロナ禍の自粛生活も三年目となりましたが、令和三年・四年はオリンピック・パラリンピックや野球など、世界で活躍するスポーツ選手の姿から、元気を貰った一年でもありました。

一方、大寄せ茶会の中止や感染者数の急増により一時は、九曜会事業の開催を危ぶむ声も聞かれました。

こうした中、小林会長から開催するという心強い言葉を頂き、四月二十九日、待望の新樹の茶会が催される運びとなりました。当日は荒天でしたが、名古屋からの来客もあり、道場は久々に参加者の笑顔で溢れました。

改めて、茶の湯を楽しむ日常がある幸せを感じ、世界に明るい兆しが訪れるよう願う一日となりました。

(各席の詳細は6ページ)

九曜会事業報告

〈令和三年七月〜令和四年八月〉

○理事会

令和三年七月十八日(日)

ホテル武志山荘

新型コロナウイルス感染症の感染拡大第五波が全国的に拡がり、ワクチン接種が急がれる中、総会は中止となりました。今年度も理事会を以て総会に替え、令和二年度九曜会事業・会計決算報告、並びに令和三年度事業計画・予算が審議、承認されました。

○亀山茶会

令和三年九月二十六日(日)

出雲大社北島国造館

【献茶式】



感染予防の観点から今年度も恒例の茶会はとり止め、献茶式が催行されました。厳かな祝詞の奏上に続き会員が見守る中、静かに献茶が行われ、参列者一同の健康と

当流の発展を祈願しました。

【拝服席】

亀山会館 亀遊の間

担当 佐藤・伊藤社中

来客数 五三名

時折雨のバラつく亀山茶会は、今年もコロナ禍の為、人数を制限して、献茶式と拝服席だけとなり、参列された方に呈茶でおもてなし致しました。

コロナ対策には大変気を遣いましたが、少しでも心穏んで貰えるように置床や展観を設け、茶盤も種類多く持ち出し、お菓子も今年のオリンピックを記念して、五輪の色を練り込んで作って頂きました。早く以前の様な茶会が出来ますよう祈る思いでした。

(伊藤社中 高野明子)





初めて茶の湯の手ほどきを受けた日を今でも覚えています。鉛筆と大学ノートを持って稽古場に行きますと、水屋に座らされました。まずここで、水屋の絵を描きなさいと言われ、水屋棚や吊り棚、水屋甕、茶巾盥など、そこに置いてあるお道具を全部描き、その名称も書き入れました。私は絵を描く事が苦手で、とても嫌な記憶があります。水屋の正面に座って描くのですが、座る位置が悪いとか、実際に手に取れるものは触ってよく見て描けと言われ



れました。そして、手に取った物は元の位置に戻すように言われました。戻した後、位置が悪いと「右、もう少し右、違う、行き過ぎ。あ、ま、うん」と言われたことを覚えています。

答えも正解も別にあるわけでもなく、その人の感覚や感性なのでしょうね。私をはじめにそこに座った時、いい位置に置いてあるのですから、ただそこにないと気持ち悪いということでしょう。何ページも描き直し、どこに何を置くのか、道具の名前、扱いや準備する順番までも自然と覚えま

した。水屋というのはお勝手でありますので、特に決まったルールがある訳ではなく、その家、その人によりけりだと思います。特に流派でどうこうはわかりませんが、やはり、水屋作法は特に厳しいものだと認識しております。だいたいの稽古場では横にお古い先生が付いて座り、目を光らせているイメージであります。

そんな事で、実家の稽古場も大半の稽古は水屋にありというような雰囲気、私が父から教わった茶の湯の稽古は以上です。ちなみに今も、毎月名古屋の稽古場に参りますが、私が使った後の水屋で、父は首を傾げながら置き直しておりますね。



水屋は茶の湯の特等席でもあります。茶事においても全体を把握でき、壁や戸を隔てて主客の息遣いが聞こえてくるのであります。客の席入の様子を伺いながら亭主の準備をし、席へと送り出し、進行の様子を感じ、席中で何が起ころうとも、タイミングよく対処出来るよう控えております。私も宗匠に付いて茶会や茶事で水屋に控えておりましたが、茶の湯の中でも一番好きな時間でありました。一席の点前が終わる、茶道口が開き、建水を片手に宗匠が出てこられると、脇で控えております私に、なんとも笑顔でその建水を手渡される。次の席との合間に、「一服いかがでしょうか？」と聞きますと、「どつちやでもけつこうでえすう」と、口癖のように答えられる。いつもその繰り返しでありました。悲しくも今は経験する事がなくなり、残念な限りであります。

賛助会員の皆様の日々のお茶のかかわり、会の活動を紹介するこのコーナー。今回は、亀山茶会でお茶席担当もされたおんぼら会です。



亀山茶会30周年記念茶会にて

約二十年前の正月、ふとしたきっかけで、出雲に家元のある茶道「三斎流」に入門することになった。松江藩主、松平不昧公が茶道をこよなく愛し、広めた影響もあり、出雲地方では茶道が盛んで、茶会も多く、色々な機会にお茶を頂くことが多い。お茶を頂く場合の最低限の作法は知っておいても損はないと、数人のチョイ悪おじさんが、気楽な気持ちで入門することになった。ただし、真面目に一からお点前を習うつもりは誰も持っておらず、中には「お酒会」と勘違いしてメンバーになった人もいた。なにはともあれ、月一回家元のうちに集まって、作法どおりお茶を頂く練習をすることとし、その中で、本格的にお茶を習いたい人は抜け駆け自由というルールとした。



おんぼら会のみなさん

法をそろそろ始めませんかと提案されたが、全員が不快感(?)を示し、提案は撤回され、二十年間殆ど進歩のないままである。お点前としては、たまに盆点てをするくらいであるが、全員それで満足している。ひと月に一回、日常を離れて、お軸を拝見し、野花を愛で、美味しいお菓子を頂き、一服の美味しいお茶を頂くことで、少しでも日頃のストレスの解消になればというのが、メンバー全員の共通の想いである。

会の名前は「おんぼら会」という。習い始めて一年くらい経った時、会の名前を付けようという事となった。会の性格がよく表れている良い名前だと自負している。何れにしろ、日常の慌ただしさの中で、心を落ち着かせる場として、茶道は意味合いを持つと感じている今日この頃である。もうしばらく「おんぼら会」は続きそうである。

(おんぼら会会長 中川正久)

—第7回— 先達探訪 —三齋流の先生を訪ねて—

今回は、長年、九曜会常任理事、雲南翠木会会長をなさり、ご活躍されている佐藤忠正先生です。

十一月下旬、先生のお宅にお邪魔しました。お住まいの掛合町は、丁度紅葉で山々がとても綺麗でした。お稽古をされているお茶室に案内され、おいしいお茶を頂きながらお話を伺いました。



佐藤忠正先生

◆三齋流との出会いとは？

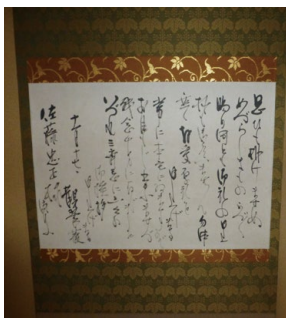
昭和四十八年十二月、勤務地の松江から木次となり、茶道教授の渋川恒夫先生に巡り合い、三齋流は家元が出雲市にあり、多くの男性が茶道を修めていると聞き、早速、杉山郁子先生を紹介して頂き稽古を始めました。

◆祥山宗匠との思い出は？

昭和五十年十月十日の宗瑞宗匠の「道統継承」並びに祥山宗匠の「古稀祝賀記念」茶会で、多くの若い男性の中でお手伝いさせて頂いたのが、初めての茶会参加でした。会場では祥山宗匠にご挨拶も出来ない未熟者でした。

その後、私は参加出来たお礼と無礼を詫げる手紙に、山の物を添えました。数日後、祥山宗匠からお礼の文（消息）と色紙が届き、恐縮しました。早速軸装にし、大切な宝物としています。

退職後、この茶約と三齋公の消息に書付をお願いしました。宗瑞宗匠は間もなくご逝去され、茶約は簡書がありません。私はこれを「つつがなし」の茶約として、宗匠を偲ぶ最高の道具として大切に保存しています。



◆宗瑞宗匠との思い出は？

昭和六十一年の夏に、三齋公の画像の前で「中伝免許状」を拝受し、今後は一人でも弟子を持ち、茶道に精進するようにとの説示を受けました。

宗瑞宗匠には直接お点前の御指導を受けることはありませんでしたが、県外勤務でも、各地の茶会でお手伝いをさせて頂きました。仙台では、五〇〇万年前の「埋れ木」で作られた茶道具等を見ました。この「埋れ木」で、三齋公御手造りの「黒づる写」の模写を宗瑞宗匠の了解を得て、日本工芸会の小竹孝氏に製作して頂きました。

◆特に印象に残るお茶会は？
昭和五十一年十一月二十三日に、祥山宗匠をお迎えした木次町の坂本邸のお茶会です。私は茶席でのお点前は初めてで、祥山宗匠の前に緊張した状態は、忘れる事はありません。



◆先生にとつてお茶とは？

茶道は、総合芸術とも称されます。私は芸術家の故渋川先生から多くのアドバイスを受け、感謝しています。美術館や寺院を巡り、また、各地の大寄せ茶会等に参加しました。今は茶道の本やテレビを視聴し、お茶が生活の一部になっています。

◆後輩に伝えたい事は？

三齋流は「口伝」と言い続けられて来ましたが、この度、基本的なテキストが発行される運びとなった様です。中伝取得者はこの機会に出来るだけ弟子を取り、伝統ある茶道の伝承に努められ、三齋流が興隆する事を願って止みません。

◆佐藤先生にはお忙しいところご協力頂き、心よりお礼申し上げます。先生の益々のご健康をお祈り申し上げます。

（広報部 井谷安江）

観音寺 本尊開帳で供茶

令和三年十月十六日（土）

出雲市渡橋町の観音寺で、三十三年ぶりとなる御本尊「十一面観世音菩薩像」が御開帳されました。観音堂では特別法要が営まれ、宗浦家元による供茶式が行われました。

法要後は、厨子に遷座した御本尊を担ぎ、朝山住職や役員が市内約2キロを練り歩きました。



観音堂供茶式

神勝禅寺で献茶

令和四年五月二十八日（土）

臨済宗建仁寺派の神勝禅寺（広島県福山市）で「新緑茶会」（神勝禅寺主催）が開かれ、宗浦家元による献茶式が行われました。

薄茶席、立礼席（三齋流翠尚会担当）、点心席が設けられ、九曜会からも十数名が参加しました。

また、当日は細川護光様、宗浦家元、花園大学国際禅学研究所の芳澤勝弘氏による鼎談も行われました。



（右から）細川様、家元、芳澤氏

今岡祥子先生に知事感謝状

令和四年五月二十七日、今岡祥子先生は、長年、茶道を通して子どもの健全育成に功績があったとして、今年度の青少年健全育成功労者表彰を受け、丸山知事から感謝状が贈られました。（五月三十一日付・島根日日新聞より）



茶掛談

和田貞夫

◆言霊（コトダマ）の国

世界の人々が、現在使用している文字は、次の二つの種類に分けられる。

・表意文字 — 漢字など文字が一定の意味を表すもの
・表音文字 — アルファベットやローマ字など音声だけを表すもの

我が国では、表意文字（漢字）と表音文字（仮名）がうまく組み合されて使用されてきた。

万葉集の歌人・柿本人麻呂は、日本の国を、次の様に読んでいる。
しきしまの大和は

言霊の助くる国ぞ

言霊（コトダマ）とは、言葉の中に霊・魂が宿っていて言葉と実体（現象）が一体化するもので、発言する言葉の意味とそれによって招く結果に相関関係があると古来から日本人は信じていた。故に縁起の悪い不吉な言葉を慎み、縁起の良い吉兆の言葉を大切にしてきたのである。

例えば、おめでたい結婚式では披露宴は以上で終了しますとは言

わないで、お開きにしますと発言するなど日本人は言霊を信じ言葉の使用に気を配ってきた。

◆茶室の掛軸

○第一の茶道具「掛軸」

千利休に茶の湯を教わった宗哲が利休から授かった口伝秘事を書き留めた有名な書「南方録」に、「掛物ほど第一の道具はなし客と亭主共に茶の湯三昧の一心得道の物也。墨蹟を第一とす。其の文句の心を敬い、筆者の徳を賞翫する也。仏語・祖語・筆者の徳を兼ね用いるを第一とし、重宝の一軸也。」と記されているが、茶室で使用される道具の中で床に掛ける掛物は最も重要視されてきた。

その茶室の掛物として禅宗の高僧の書いた物、特に中国の唐・宋時代や我が国の鎌倉・室町時代の禅僧の墨蹟が用いられたが、なかでも南宋の臨済宗の僧である圓悟（えんご）や虚堂（きょどう）の墨蹟は珍重された。

武者小路千家第十五代の千宗屋宗匠は、「茶会を開く時に、まず選ぶものは掛物と茶碗です。特に

掛物では一行書をよく用いる様にしています。」と語っておられるが、茶室の床に掛物は、その日の亭主の茶会に対する心構えを表わすもので、おもてなしの主題であり茶の湯の席で最も重要視されている茶道具である。

○茶掛の種類

茶室に掛ける掛物は、絵画・和歌（連歌）・消息・墨蹟等が用いられている。

・絵画 — 室町時代には、鑑賞として中国の絵（唐絵）が多く使われていたが、小堀遠州以後になると狩野派や土佐派の大和絵が用いられるようになった。

・和歌 — 武野紹鷗が最初に用いたと言われている。紀貫之や藤原定家等の和歌や連歌の古筆（きこう）切（古い歌集の一部を切り離して掛物としたもの）がよく使用された。

・消息（手紙文） — 千利休以後から使用されたが、特に古田織部が利休追悼茶会で利休の消息を用いたのが有名である。

・墨蹟 — 村田珠光が参禅する一休禅師から得度の証しとして圓悟墨蹟を拝領したものを茶室の掛物として用いたのが、墨蹟掛軸の始まりであるとされている。

墨蹟は、人に見せるものではなくて書を通して記述者である師と

対話し自らが深く内省するために用いるものであった。

絵画や和歌が見えるものであるのに対して、墨蹟は考えさせるものである。

墨蹟には、豎に書いた豎一行物と二行物、横一行の横物があるが、特に高僧が書いた印可状・法語・禅語など多くが用いられた。

なかでも南宋の高僧である圓悟（えんご）克勤（こくきん）と虚堂（きょどう）智愚（ちご）の書は珍重されているが、特に圓悟の参禅の印可状は圓悟が弟子の虎丘紹隆に授けた物で「流れ圓悟」の愛称で知られ、茶の湯世界で第一の墨蹟と仰がれ有名である。

この印可状は、薩摩沖で漂流していたのを拾い上げられて大仙院の宗巨へ献上され大徳寺へと渡ったが、四十五行あった印可状は伊達政宗によって切断され、前半部分は堺の禅雲寺を経て松平不昧の所有するところとなり、後半部分は伊達政宗の所有となったが、後半部分は現在、残念ながら所在不明である。

記録によると、文化年間に圓悟墨蹟と虚堂墨蹟の二点が松平不昧により高額な費用負担によって購入されて以来、雲州名物として百余年にわたって松江藩に保管されていたが、昭和五年に松平家から雲州名物の十四点が東京国立博物館へ献納されたのであった。この

献納された圓悟・虚堂の墨蹟は、いずれも国宝に現在指定されている。

筆者は、東京国立博物館においてこの十四点の雲州名物を拝観したが、これが島根県に残されていたらなあと残念な思いをしながら暫く感慨に耽ったことがある。

◆茶の湯は、心道である。

○掛軸を心の糧に

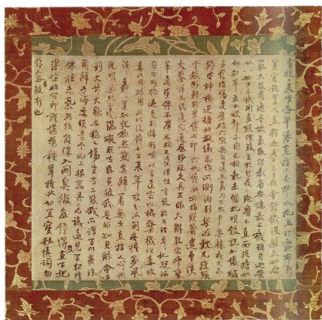
茶室に入ると、まず最初に床の前に座して正面の掛軸に対して敬虔な気持ちで一礼をする。

それは、まず初めに掛物の執筆者に挨拶をして書かれている字句をよく読み、思考を巡らして思いを深め、納得して自らの心の糧にするのである。

茶の湯が只の茶飲みに終わってはいけない。茶の湯を介して日頃の自分の生活を内省し、己れの明日からのよき道を求めていく禅の修業が茶の湯である。

民芸運動の創始者である柳宗悦は、茶の湯は心道であると言っているが、茶室は正しく心を鍛える道場である。茶室において亭主と客が共に茶掛の字句を通して執筆者の人柄・人徳を賞翫（しょうかん）し、その生き方を学んで自らの生きる道に活かしていくことが大切である。

茶の湯を通して学んだことを日々の暮らしの中に活かしてい



流れ圓悟 国宝
(東京国立博物館蔵)

く、それによつて茶の湯が活きてくる。茶の湯と日々の暮らしを一体化していく努力が必要である。神仏の崇拜でも神社・仏閣の中だけの祈りではなく、常日頃の暮らしの中においての敬虔な祈り、不断平生の心の持ち方が大切で、それによつて人々は救われるのである。

○文字から学ぶ

故人曰く、「文字は道を貫くの器なり。文字を離れて道を求む可らず、文字を離れて道を伝う可らず。」と。

古人人々は、文字を大切に文字を学んで自らの生き方を考え、己れの人生の糧としてきた。文字を学んで生きるためのエネルギー源として活用してきたが、しかしながら最近活字嫌い、読書離れの人が多く、スマートフォン

等の画像を追つて、活字に接する機会が少なくなつてきている現状は実に残念である。

茶室の掛物は、特に禅語の墨蹟が多く、その解説・理解に苦勞することが多い。現職の校長時代に同志の教員を集めて、五翠会・五峯会・五雄会を組織し、宗瑞宗匠の御教授の下で茶の湯の稽古に励んだことがあるが、茶事の理解を深めるために禅語の勉強をやるのではないかと一同相談し、禅語の研究家である観音寺の朝山一玄氏を講師に招いて月一回、一か年間禅語勉強会を開いたのである。

朝山一玄氏は早稲田大学哲学科の出身で、淡交社発刊の「茶席の禅語大辞典」の執筆者であり禅語の造詣が深く、氏の作成されたテキストを使用しての勉強会は、その後の茶の湯の修業に非常に役立ったのであった。

利休七哲の一人、古田織部は、「覚書」の中で「茶室に入り候時は文字掛かり候、文字の心知らずとも真実の道は比の内に有るべく候かと眼を付けて床かまちに寄り候て拝見あるべく候。」と述べているのを思いながら、難解な禅語も多かったが、とにかくまずもつてよくよく拝見して、その文字の心を把握しようと、テキストの禅語に眼を向けて勉強会に臨んだのであった。

◆亭主と客の心

○賓主無し

禅語に「無賓主」という言葉がある。悟りの道には、亭主と客の上下の区別なく、お互いの心が融け合つて一体となる、共に平等であるという意味であるが、茶の湯の和の心にびつたりと通ずる言葉である。

松平不昧は、「客の心になりて亭主せよ、亭主の心になりて客いたせ」と言っているが、正しく客と亭主の心がびつたりと合つてこそ、茶の湯は深みがあり楽しいのである。

○徳川頼宜と細川忠興の交遊

紀伊大納言徳川頼宜は、若い頃から茶の湯を好み、細川忠興（三斎）など多くの茶人達と交遊があった。

ある時、細川三斎が江戸在留を終えて領国へ帰国する際に、徳川頼宜の家臣に対して、このたび帰国することになったが、自分は年寄つて次の出府ができるかどうか分からない、そこで末期の思い出にぜひ紀州公秘蔵の虚堂墨蹟を拝見したいと伝えたところ、それを聞いた徳川頼宜は快諾し、茶会を開いて細川三斎を客として招いたのであった。

当日、細川三斎は心をとぎめかして紀州家へ参上し、茶室に入つて床を拝見すると、床の掛物は所

望する虚堂墨蹟ではなくて他の高僧の墨蹟であり、その掛物には弱気になった三斎を勇気づける文字が書かれていた。

細川三斎は痛く失望したが徳川頼宜自らのお点前で茶事が終了、茶室から書院へ出ると、頼宜の家臣が控えていて主人は三斎公より末期の思い出に虚堂の墨蹟を拝見したいとの所望があつたが、細川公には益々息災にて御健勝で再度出府されんことを望んで、床には勇気づけの掛物といたしました。所望の虚堂の墨蹟は、書院にてご覧に入れよとの仰せでございますのでこれにて御覧をと、虚堂墨蹟を三斎の前に差し出したのであった。

細川三斎は、これを聴いて紀州公の心配りに痛く感動し、今後は節制息災に務め幾度も出府したい、そして虚堂墨蹟は次の機会に拝見したいと、厚く礼を述べ元氣を出して退席したのである。

◆ ◆ ◆

亭主の客に対する気遣い・おもてなしの心配り、それに応じた客の心意気、実に亭主と客の心が互いにびつたりと合つた大茶人同士の正しく賓主無しの言葉通りの心温まる逸話である。

九十路に入つた筆者は、最近急速に体力が衰え気弱になりがちで自室で読書三昧の日々を過ごすことが多くなつてきた。



そんな中、広報部から原稿依頼があり老骨に鞭打つてどうにかこの稿を終えて、まずは一服をと奥の間に入つて床に目をやると、宗浦家元様から頂いた建仁寺の小堀老大師の御筆が仰がれたのである。

老大師御筆の文字は「慈蔭」の一言で「慈悲蔭覆」を縮めた言葉で、人は誰でも生まれながらにして多くの人々の慈悲を頂き、そのお陰で生きていくという意味である。文字を見つめながら次第に心の底からにじみ出る思いを抑えることができず暫く、感慨にふけたのであった。

筆者は、九十余年の永きにわたつて多くの皆様のお蔭を受けて今の自分がここにいます。改めて頂いた慈悲にありがたいとの一声をかけながら一服を干したのであった。

実に慈蔭そのものの永い人生であったと日夜思う今日この頃である。

祝・米寿（昭和十年生まれ）
おめでと〜うございます

・伊藤久子先生 （大野社中）
・佐藤忠正先生 （佐藤社中）
・岡田喜世子先生 （大田社中）
・金森訓子先生
・藤原澄子さん
ご多幸とご健康を
お祈りいたします。

1ページより続く

○三斎忌

令和三年十二月五日（日）

【濃茶席】
観翠庵道場 松霞亭

担当 福岡社中

来客数 五二名

今年も濃茶席は前年同様、点前無しで三人ずつ飲み回しという形になりました。一席九人まで、マスク着用、手指消毒、茶碗等も熱湯消毒し、コロナ対策をとりながら十三年ぶりに松霞亭で濃茶席担当でしたので、行き届かない点も多く有りましたが、点前が無い分、皆様とゆつくりお話が出来た事は良かったと思います。

前日の寒い中での掃除やコロナ渦の中、お参りいただきました皆様にお礼申し上げます。

（福岡社中 福岡喜代美）



【薄茶席】

観翠庵道場 富士の間

担当 山本・杉原社中

来客数 六一名

社中四名と受付の方とで、緊張の内に席が始まりました。長い間、お点前をする茶席を担当することが無く新鮮で、新しいページを作る気分でした。充分な時間に心ほぐれ、絆・一体感が生まれました。



宗浦家元筆
「看々臘月尽」

無駄に待たせない進行が茶席の質を高め、家元様、典子先生をお迎えしても心を整えて臨むことが出来ました。事務局も綿密で、大

変お世話になりました。終わってみると、「楽しかった」という皆の感想でした。

（山本社中 山本ますみ）



○新樹の茶会

令和四年四月二十九日（金・祝）

【薄茶席】

観翠庵道場 富士の間

担当 山崎社中

来客数 一〇〇名

祥山宗匠、宗瑞宗匠、宗育宗匠、宗浦家元と、四代の家元への感謝の思いをこめ、関わりのあるお品を使わせていただき、お客様をお迎えしました。春雨が強く降る中での



お茶席となりましたが、皆様笑顔で和やかな席にしてくださいました。また、名古屋からのお客様

をお迎えできたことも大変嬉しいことでした。

準備や当日の運営等、皆様のご協力に感謝申し上げます。

（山崎社中 山門明美）

【呈茶席】

観翠庵道場 松霞亭

担当 杉山・今岡社中

来客数 九九名



細川護貞公御筆「閑居可以養志」

前日からの雨で足元の悪い中、名古屋からのお客様を始め、多数参加頂きました。万全の感染症対策で、今年初めてのお茶会が開催出来る喜びの意を込めた春の設えで、皆様をお迎え致しました。

花の入れ方の難しさを感じ、茶杓銘「初心」、歌「よ毛（も）の海（に）飛（る）可（が）る心もちてこそ人能（の）栄ゆる道もあるべし」の如く初心に返り、四方の海の如く広き心で茶の道を歩めればと、思った新樹の茶会でした。

（杉山社中 錦織君子）



○青年部さくら会

今年度の青年部の活動は、小山園ボランティアだけを予定しておりましたが、コロナ渦中の為、その活動でさえ、一度も実施出来ませんでした。

インスタグラムでの情報発信の方も、茶会開催が少なく、投稿出来たのは道場掃除のストーリーズぐらいでした。以前のように、華やかな写真を制限のない中で投稿出来る日が、一日でも早く来ることを心から祈るばかりです。

（青年部 三島羊子）

三斎流九曜会公式

◆ホームページ◆

「三斎流九曜会」で検索

◆Instagram◆

アカウント

sansairyu_sakura